

「日本語日本文学講座—女性と文学—」

秋が深まり、紅葉の美しい季節を迎えました。

ご好評につき、今年も日本語日本文学の公開講座を開催いたします。今年度のテーマは「女性と文学」とし、「女性」という視点から文学作品を読み解いていきます。自然豊かな太宰府のキャンパスで、秋の深まりを感じながら、ともに文学を楽しみましょう。皆さまのお越しを心よりお待ちしております。

10/25(金) 13:00～14:30

王朝女流文学の世界～『源氏物語』の誕生～

文化教養学科 講師 松本 美耶

11/15(金) 13:00～14:30

玉の輿の行き先は～樋口一葉『十三夜』を読む～

文化教養学科 教授 桐生 直代

12/6(金) 13:00～14:30

「女ことば」の歴史

文化教養学科 講師 藤田 優子

【開催場所】 福岡女子短期大学キャンパス

【受講料】 無料

【申し込み】 左のQRコードより、各講座の1週間前までにお申し込みください。



または、ハガキ、Fax、E-mail、本学ホームページ掲載の申込用紙、いずれからでもお申し込みいただけます。

※ハガキ、Fax、E-mailの方は、お名前・ご年齢・郵便番号・ご住所・お電話番号・受講希望日・講座名(日本語日本文学講座)をご明記の上、お申し込みください。

〒818-0193

太宰府市五条四丁目16-1 福岡女子短期大学 庶務課

電話:092-922-4034(代表) Fax:092-922-6453

E-mail:bunkyo@fukuoka-wjc.ac.jp ホームページ:<https://www.fukuoka-wjc.ac.jp/>

日本語日本文学講座—女性と文学—

■ 王朝女流文学の世界～『源氏物語』の誕生～（松本 美耶）

現存する最古の長編物語として今もなお世界中で読み継がれる『源氏物語』。その作者は、2024年NHK 大河ドラマ「光る君へ」の題材となり脚光を浴びた紫式部です。彼女は中流貴族の娘として生まれ、やがて結婚や出産を経たのち、一条天皇の中宮・藤原彰子に女房として出仕するようになります。一体なぜ紫式部は『源氏物語』を世に送り出すこととなったのでしょうか。そこには紫式部自身の人生の挫折と、時の権力者・藤原道長の政治的な思惑とが深く関わっていました。今回の講座では紫式部の人生をていねいに辿りながら、『源氏物語』誕生の裏側を探っていきます。

■ 輿の行き先は～樋口一葉『十三夜』を読む～（桐生 直代）

明治の作家、樋口一葉の『十三夜』を取りあげます。高級官僚に見初められて嫁いだ「お関」は、夫から虐待を受けるようになります。離縁を決意して実家へ戻りますが、両親の説得を受けて婚家に戻ることを決めます。その帰り道、お関が乗る人力車を引いていたのは、かつて淡い思いを寄せた幼なじみでした。お関は言います。「誰も憂き世に一人と思ふて下さるな」——生きるのに不自由なのは、じつは女も男もないという、一葉が描く、旧暦十三夜の月明かりが照らす人間の思いと哀しみを読んでいます。

■ 「女ことば」の歴史（藤田 優子）

「月がきれいだわ」「今夜は満月だったかしら」——この台詞を聞いたとき、みなさんの頭の中にはどのような人物のイメージが浮かびましたか。

日本語には、「女ことば」があると言われています。しかし、「～だわ」「～かしら」といったことばを実際の女性は使っているのでしょうか。実は、一般に「女ことば」とされる表現には、現代の女性が日常会話では使わない表現も多く含まれています。では、いつの、どのような女性が「女ことば」を使っていたのでしょうか。

本講座では、古代から現代までの文献に残る女性のことばを確認しながら、「女ことば」というイメージがどのようにして作られていったのかを考えていきます。